

ハリー・ウラタの採集ノート：岩崎重人・松村友次・ 大山幸雄・チャップリン松の森が語る〈ホレホレ節〉

中 原 ゆかり

0. はじめに

へ 今日のホレホレ 辛くはないよ タベ届いた 里だより

〈ホレホレ節〉は、19世紀末にハワイに渡った日系一世たちが、砂糖耕地の労働の折にうたった仕事歌である。「ホレホレ」とはハワイ語で砂糖黍の枯れ葉を手でしごきとる作業のことをさし、ホレホレの作業の時に多くうたわれたことからこの呼称がある。その歌詞は相当に多く、仕事の辛さや故郷への思い、セクシャルな歌詞など内容も豊富で、当時の一世の生活感情を反映している。移民史には移民初期の一世たちの過酷な生活を物語る資料として、必ずといってよいほどその歌詞が掲載されてきた。

〈ホレホレ節〉は二世へと継承されることはなく、第二次世界大戦後には消えていった。しかし帰米二世のハリー・ウラタ (Harry Minoru Urata, 浦田実) が、1960年代から1970年代にかけて高齢となった一世たちを約30名訪ね、〈ホレホレ節〉を録音した。一世たちの〈ホレホレ節〉は口頭で伝承されてきたため旋律の違いが著しかったが、ウラタは多くの一世から録音した〈ホレホレ節〉をもとに旋律を標準化して1981年に著作権を獲得した。そして自らの営む音楽教室で教え、CDを制作し、日系のイベントでうたう等して普及に努めた。今日ハワイアンや日本民謡、講談等でとりあげられるようになった〈ホレホレ

節〉は、ウラタが標準化した旋律の影響のもとにある。

ウラタは一世たちのうたう〈ホレホレ節〉を録音する際、耕地での仕事の状況等についてもインタビューをおこない、録音している。そして自ら録音テープを聞きなおして採集ノートに書きとどめた。ウラタの採集ノートは、彼が著作権をとるまでの過程の1つであり、一世たち自身が耕地での仕事の状況や当時の生活について語った貴重な資料である。なぜなら、これまで多くの移民史に〈ホレホレ節〉の解説が記されてきたが、一世自身の言葉は全くといってよいほど記述されてこなかったのである。本稿ではウラタの採集ノートの中から、中原（2010）で扱った朝倉カツエと藤間美佐、および中原（2011）で扱った井上熊太郎と安竹宇一郎に続き、岩崎重人、松村友次、大山幸雄、チャップリン松の森の4名に関する部分を紹介したい。

岩崎重人、松村友次は、耕地で働きながら〈ホレホレ節〉を覚えた。岩崎重人への録音は、ホノルルのダウンタウンにあったウラタのスタジオで行っている。松村友次への録音は、ウラタがハワイ島ヒロの日本語ラジオ放送のアナウンサー佐藤しのぶに依頼し、テープをウラタのもとに送ってもらったものである。また大山幸男は耕地で働いた経験はないが、一世たちのうたう〈ホレホレ節〉をきいて覚え、パーティ等でうたってきた。大山幸雄への録音は、作家の梶山季之（1930-1975）がハワイに訪れたときに、梶山とウラタと2人で元山玉菰の家で録音したものである。梶山は京城生まれで、敗戦後両親の故郷である広島県に移住しており、両親の故郷の出身者がハワイでうたったという〈ホレホレ節〉を聞きたいとウラタに申し出て、ウラタが大山を探し出した。梶山は京城中学卒業で、ウラタの後輩にもあたる。またウラタのノートを見ると、大山のインタビューには、関屋という人物名も記されているが、残念ながら関屋について詳しいことはわからない。

チャップリン松の森は日系の相撲界で有名で、本名は松永岩之進だが、ウラタも彼の紹介にはチャップリン松の森の名前を使っていた。彼は耕地で働いた経験があるが、彼の〈ホレホレ節〉は自身が耕地で覚えたものではなく、母が家庭でうたっていた歌を聞き覚えたものである。

チャップリン松の森、岩崎重人、松村友次、大山幸男、チャップリン松の森の4名とも、ウラタが新聞記事やエッセイで名前をあげているため、本稿でもウラタのノートにあるまま実名を記述した。なお、ウラタのノートそのものは手書きで縦書きで記されているが、本稿では横書きに改めた。そのためウラタのノートの漢数字は本稿では全て算用数字となっている。漢字等の表記については、カタカナ表記と英文表記等の不統一がみられるが、あえてウラタの表記にそのまま従った。

著者は2005年にウラタから採集ノートのコピーを渡され、日本での公開を依頼された。中原（2010）、中原（2011）で既に公開した4名の分、および本稿で公開する4名のあわせて8名分までが、ウラタが録音テープを聞き直すという作業によってノートに記した全てである。

1. 岩 崎 重 人

1979年11月18日浦田ミュージックスタジオにて録音、当時83才

浦 田「岩崎さん、こんにちは」

岩 崎「こんにちは」

浦 田「もうちょっと前にでてください。すみません、岩崎さんは？名前？」

岩 崎「岩崎重人でございます」

浦 田「重は重箱の重ですか。それと人、ああそうですか。お年は今？」

岩 崎「今83才になります」

浦 田「今日が1979年の11月18日ですね……であの出身地はどちらですか」

岩 崎「熊本県菊地でございます」

浦 田「はあ、菊地郡ですね。いくつの時ハワイにこられたんですか？」

岩 崎「6つの年来ました」

浦 田「はあ、6つの？西も東もわからん時ですね」

岩 崎「はあ、わからん時ですよ」

浦 田「呼び寄せで？」

岩 崎「親と３人できました。両親２人と」

浦 田「はあ」

岩 崎「連れてきたんですよ。わたし日本から」

浦 田「あの、お父さんとお母さんがですか」

岩 崎「ええ、来る時に」

浦 田「お父さんとお母さんはその時初めてですか？ハワイに？」

岩 崎「ハイ、初めてです」

浦 田「その時に一緒にこられたんですか」

岩 崎「ハイ」

浦 田「あはあ、そうですか。で、岩崎さん一世でしょう？」

岩 崎「first generation なにも」

浦 田「ほう、そうですか。ではもうお父さんお母さん生きておられたらもう
随分……」

岩 崎「もう？」

浦 田「いくつくらい？現在いきておると仮定して」

岩 崎「100なんぼになるでしょう」

浦 田「100こしてますよね。へえ、それからあの……6つの時には仕事もで
きないですけど、いくつの時仕事されたんですか？」

岩 崎「仕事は14からはじめました」

浦 田「ほう、14からですな。それまで学校へいっておられたんですか」

岩 崎「学校へ行っていました」

浦 田「ほう、14の時から、どこで仕事されたんですか。一番はじめは」

岩 崎「ホームですよ」

浦 田「ホームにご両親と一緒にいかれたんですか」

岩 崎「あそこへ移動してきて」

浦 田「ご両親なにやっておられたんですか？」

岩 崎「あれは黍の方の百姓ですよ」

浦 田「やっぱりね」

岩 崎「プランテーションの……」

浦 田「プランテーション、ワーカーですよ？それで14の時、岩崎さんも」

岩 崎「ちょうどお父さんが病気してから、とうとう妹が2人いたので家庭
がやっていけんようになったから、私が退学してから」

浦 田「はあ、そうですか？」

岩 崎「家の補助にあたったとですよ」

浦 田「ああ……ホームですよ。ではどうゆう耕地の仕事をしておられたん
ですか？」

岩 崎「私は14の年からはじめてキビ畑に仕事して4年くらい黍畑やったで
しょう。キビ畑の仕事を……それから後は製造にはいったから」

浦 田「はあ、4年の中にやった仕事ちゅうのはどうゆう？」

岩 崎「ほとんど黍畑の仕事」

浦 田「いやたとえばハッピーコウとかやりました？」

岩 崎「はい、ハッピーコウもやる」

浦 田「ハナワイ？」

岩 崎「ハナワイはないですから」

浦 田「そうですね、あの……ハワイ島はどうしてないんですか？」

岩 崎「ありゃ雨が多いからハナワイせんでも黍は充分太りますよ」

浦 田「あの、なんですか……あのフルームで水もって来るんですか？」

岩 崎「黍を流すだけですよ」

浦 田「流すだけですか。はあ、そうですか。水は全然もう心配ないんです
か？」

岩 崎「もう雨水ばかりです」

浦 田「ほう……」

岩 崎「雨水でもう充分ですよ」

浦 田「有名ですよ」

岩 崎「ハワイ島の雨ゆうたら……」

浦 田「有名ですよ。それで、ああとホレホレやったことございますか？」

岩 崎「はい、ホレホレもやりました」

浦 田「何年くらいやったんですか？」

岩 崎「さあ、何年？まあ毎日毎日じゃないんですからね、年に3、4回はど
うしてもホレホレがありますから、その時はずっとやっております
よ。プランテーションにいる間黍畑に働く間は4年くらいやってます
よ」

浦 田「ほーでね、ホレホレの時黍の枯れ葉をね、とるんでしょ。でね枯れ
葉をです、僕はあの……ヒロの近辺にいてやっぱり熊本県出身の
ね、おばさんに、いろいろとこうインタビューしたんですけどね。あ
の……その方がいわれるのには、取ったむしり取った黍の葉を胸に入
れるとこういわれたんですよ。胸にいれるっちゅうたらこの中に入れ
るんかと思ったんですよ。この胸の中に、あれは違うんでしょ
ね」

岩 崎「胸ゆうと私が説明すればまあ黍を植えるRowの間にその黍の葉は
ずーっと敷きよったですよ」

浦 田「そこへ取っておくわけですよ。それはそのまましておくのです
か？」

岩 崎「はい、そのままです」

浦 田「誰かまた取りに来るとか？」

岩 崎「いえいえそんなことはありません」

浦 田「ほう……だからむねというのは、RowとRowの間をゆうわけですね」

岩 崎「まあ私らの考えではそうですが」

浦 田「そんならわかりますよね。胸いれるってこういったもんですからね、
まあこう入れたこのへんがこうかゆくなるんじゃないかと……ホーム
なんですけどもホレホレ節に

へ ホーム極楽 パパイコ地獄 ヒロのワイケア 人殺し

こういう歌があるんです。文句がね……でホームがなぜ極楽か？それが知りたかったわけです。するとちょうどまあ、あの岩崎さんがね、ホームに仕事しておられたとゆうことをききましたので、ホームちゅうのはどうですか。あのやっぱり極楽みたいでいい所なんですか？」

岩 崎「極楽か地獄が私もわかりませんが、いいところですよ。だいたいは」

浦 田「それはね、あのむろん、歌の文句はその仕事のコンデションをいっているんじゃないかと思うんですよね。あの仕事をする上に仕事がやり安いと……ホームはまあ、Flat Landで非常に平地で特に一世の人が初めて行って耕地をこう耕すでしょうね。あそこのこのいろんなものをとって今後Sugar Caneを植える様にする一番始めに行った人はもうSugar Caneを植えるよりもそういうことをしたと思うんですよね」

岩 崎「さあ、あそこを開拓した人たちの苦労はよく知りませんが、ホームゆうところはだいたい平地で石やなんぞはないようでしたから」

浦 田「そうですね。だから今度僕はどこですかね。コナの方をインタビューした時に……その方がやっぱりヒロ郊外のワイケア耕地で一番始めに仕事されたそうですよ。というのはそこで開拓されたわけですよ。石が……こんな大きな石がもう出てきて困った、ほんとうにえらい目おうたゆうてからこういわれるんですよ。だからやっぱりその歌の文句ちゅうのは、あのホームは極楽、いわゆるLandがね、その土地が非常に平で石なんかあまりなくてそれで……今度のパパイコ人殺しちゅうのは、あそこも案外こう石なんかも多かった思うんですよね。それで仕事がやりにくかったと。それで最後のヒロのワイケア人殺しと。人殺して僕ははじめは人殺しがあったんか思うてね、それを調べたんですよ。ところがそういうあれは移民史には残っていないんですよ。人が殺されたとかね、でもこう見てなるほどこれは自分が殺されるくらい仕事が大変だったという……それを形容しているわけですよね」

岩 崎「そうですね」

浦 田「ヒロのワイケア人殺しと。それだったらわかるんですよ。で僕はあの……なんですか、ホームですね。そのホームが非常に平地であることは何かの本に書いてありましたがね、だから一番はじめに開拓して行った一世のそういう苦勞ですね、がその歌にまあ歌い込まれたわけなんですよ」

岩 崎「まあ元の人たちは随分苦勞はしておられるに違いない思うですよ」

浦 田「あとはもう、こう植える、シュガケン植えるとか、あとハナワイやったり、それからあの……なんですかこのホーハナですが、ああゆうなのはまあそんなに大変じゃない気もするんですが」

岩 崎「まあみんながやることじゃから」

浦 田「始めの人は大変だったですよ」

岩 崎「始めの人が一番大変ですよ」

浦 田「それからですね、あの……ホレホレやいろいろ耕地で仕事された。岩崎さんは他の人種と一緒にやったことありましたか？」

岩 崎「ハイハイ、だいぶいろいろな人種と一緒にやったことがあります」

浦 田「それであの……オンナの方とも女性の方とも？」

岩 崎「女性の方とも一緒にやったこともあります」

浦 田「はあ、そうですか。ホレホレは他の仕事に……特にハッピーコウなんかに比べてですね、僕はそんなにあの……えらい……ハワイでゆうえらい仕事じゃないと思いますけどね。あの……こういう歌があるんですが、こりゃ僕は間違いじゃないかと思うんですがね、これはほんとに仕事をした人でなくてただ後で自分でこう歌の文句を書いてこうじゃないかと思うと書いたんじゃないかと思うんです。

へカネがカチケン……でしょう？ カネちゅうのは、自分のハズバンドでしょう。ワヒネはハッピーコウ、夫婦そろって共稼ぎ。これはホレホレ節なんですけども、ワヒネはハッピーコウ僕はできないと思いますがね」

岩 崎「私もそう考えるのは考えますが、ある土地ではハッピーコウした者も

おるかもしれませんよ、そりゃ」

浦 田「でもね、ハッピーコウした人にききますとですね、その黍をこう肩にやるでしょう。その黍のバンドルがね、こうぱっと耳にあたるんだそうですよ。そしたらもうそれが何回も何回もやるうちにあの……この耳がね、こんなになるって……ボクサーがやられる様にね、こんなになるそうですよ」

岩 崎「私も見たことがあります」

浦 田「見たことあるでしょう。そんなひどい……女の人ができるわけないと思うんですがね」

岩 崎「まあ……女のやることだからまあかるくかついで……」

浦 田「まあ少し……ヘルプはするけれども、それは主にしてやるということばかりやできないですよ」

岩 崎「女子ではできませんよ」

浦 田「それでですよ、こうゆう歌もあるんですよ」

へ 鳥なくよりよー お寺の鐘よりも 朝の出鐘が なほつらい

出鐘のことなんですけど、やっぱり仕事行く時に出発の時に……」

岩 崎「出発の出鐘いうのがあります」

浦 田「鐘というのはどんな鐘なんですか」

岩 崎「ちょうどりバティベルみたいな鐘です」

浦 田「アメリカ製の鐘ですね」

岩 崎「アメリカ製ですよ」

浦 田「日本のお寺の鐘じゃなくて、それでやっぱり縄で教会の鐘のように」

岩 崎「そうそう……」

浦 田「はあ、そうですか、それをカランカランやるわけですか？」

岩 崎「あれがなったら、もうみんな仕事につく……」

浦 田「朝何時なんですか？」

岩 崎「6時です」

浦 田「はあ、6時」

岩 崎「はい、6時出発です」

浦 田「それでみんながそろって行くわけなんですよ」

岩 崎「ハイハイ」

浦 田「でも例えばその近辺にいる人はできるけれども、遠いところの人はどうなるんですか」

岩 崎「遠いところはまあ自由に6時になったら仕事にでますよ」

浦 田「きまった所へいくんでしょう」

岩 崎「そこへみんな」

浦 田「その砂糖黍のところにね」

岩 崎「もうどこそこへいうてちゃんと知らせてあるから……そこへみんないきます」

浦 田「それからね……あのやっぱりあの頃はなんにもリクリエーションよね、いわゆる遊びとかそういうものなかったんでしょう」

岩 崎「ないですね、まあMoving Pictureくらいですよ」

浦 田「Movieあったんですか？」

岩 崎「はいムービーありました」

浦 田「ほう、日本映画ですか」

岩 崎「日本映画です」

浦 田「ほう、月に何回くらい」

岩 崎「1週間に1ぺんくらいありよりました」

浦 田「ああそうですか。ホームなんかに劇場があってそこで……」

岩 崎「劇場を……神本さんがあそこをやっていましたから」

浦 田「はあ、そうですか。じゃやっぱりあの……バクチなんかがあったんでしょうね」

岩 崎「はあ、バクチ盛んでしたね」

浦 田「盛んでしたか、ホーであのホレホレ節の中にもね、ハレハレとか

チーハーとかね、いう言葉が出てくるんですけども……まあ、ハレハレというのはどうゆう意味なんですかね」

岩 崎「私らもあの当時はまだ年は若いしそうハレハレもきいたこともない様だが、多分それはバクチを……銭をはれということでしょう」

浦 田「日本語の？早うはれはれなんぼかはれとこう……」

岩 崎「そうですね」

浦 田「それからチーハーというのは、これはチャイニーズの言葉ですね」

岩 崎「多分チャイニーズでしょう。チーハーというのは、今ではいいよからチーハーチーハーって」

浦 田「それからですね。ホレホレの歌の文句にね、ハワイの言葉がいわゆるあの……カナカ語ですよ。たくさんは入ってくるんですよ。それはやっぱりあの……耕地なんかで仕事をしておられた一世の人たちはあの……土人に接触する機会が多かったんですよ」

岩 崎「ホームではあんまりカナカはいない様でしたがね。コハラの方にはほとんどカナカが多かったから……」

浦 田「コハラはなんといってもあれ……カメハメハー一世が生まれたところだからそうですね」

岩 崎「私もあそこで一番はじめてホノルルからあっちへ親父たちが送られたからあっちへいったんですが、あの当時はカナカばかりでカナカ語が一番先覚えました」

浦 田「はあそうですから。だからあの僕が思うのにですね。特に一番初めにまあ官約移民が1885ですか。1885からずっとどんどん日本から行った人、行き着くところはあちこちの耕地周囲をみまわしても勿論日本人はおらんですよ。自分が一番はじめにきたんですからね。そしたら結局ハワイの土人が一番先にまあ声をかけるでしょう」

岩 崎「一番近いらしいですよ」

浦 田「それで結局もう彼らと友人になるわけですよ。そうするとハワイの言葉をすぐ習う、一番先に覚えますよね、それであの……何かとにかく

くずっと移民史なんか見てますと、日本人とハワイの土人とは非常に
こう仲良くやっていたらしいですね」

岩 崎「なかなかこの土人は親切ですよ。なんでもおしみなしになんでもフ
ルーツでもなっとったら、もらいにいくとすぐくれるんですよ」

浦 田「ほ、それはね、前の国会上院議員やられたあのハイラム・フオング
ね、あの方もいっておられたけれども何かにね、演説されたその何か
が……新聞にのっていましたけどね。もしもハワイの土人がね、あの
……チャイニーズに一番はじめの頃来たね、チャイニーズに親切で
なかったならね、非常にシナ人はあうこうやっていけなかっただろう
ちゅうこともいってましたですよ。それは日本人にもいえますよ
ね。非常にこうFriendlyで……」

岩 崎「そうですね」

2. 岩 崎 重 人 1979年12月2日、第2回目の録音

浦 田「それで……岩崎さんは6つの時に来られたんでしょう？いつです
か？」

岩 崎「1902年です」

浦 田「おお、1902年というと、ペストの大火事があった2年くらい後です
ね」

岩 崎「あの、あげくでしたから……たぶん」

浦 田「あれが1900と思いますよ」

岩 崎「私はおぼえておりませんですよ」

浦 田「だから今もあの？あのへんいくとですね。パウアヒとかね、マウナケ
アゆきと建物がね、面白いんですよ。1901が多いんですよ。というの
は1900年に焼けたでしょう。その次の年にたったんですよ。僕はあれ
を見てびっくりしたんですよ。1901年というのがすごく多いんです
よ」

岩 崎「わたしはそうゆうことは気がつかんが」

浦 田「1902にこられたんですね」

岩 崎「はい、1902年です」

浦 田「そうすると、それからすぐホームにいかれて」

岩 崎「いいえ、それから大分父があっちこっち耕地をかわったもんじゃから、私、学校に行くのがずーっとおくれましたよ」

浦 田「はあ、そうですか？ずっとかわったってどこへいったんですか？」

岩 崎「コハラからちょうど私のいとこ甥になるがあれがオーラーにおったもんじゃからそれたよりにいってそれからそこをまたかわって今度カイケアの方に……」

浦 田「カイケアでどちらですか？」

岩 崎「ハマクアの……」

浦 田「はああ、ハマクアコーストの」

岩 崎「ハマクアコーストの……それからホーヒナにかわってそれからハカラウに戻ってそしてこのホームですよ。ホームは長いですよ」

浦 田「ホームは19、いつごろですかね。それでは」

岩 崎「1906か1907だったと思うんですがね、あそこへ来た時は」

浦 田「その頃はもう曾我部さんはおられたんですか？」

岩 崎「どれくらいおられたかしりませんが、私が日本に帰るまでおってじゃったから、1918までは私が覚えていますがね、その前もずっと曾我部さんはおってでしたよ」

浦 田「塾開いて」

岩 崎「えー塾開いて、盛んなこつでしたよ。もうハワイ島からずっとあそこへ下宿する人たちがたくさん来ておられましたよ。私らもあそこの学校に一時お世話になりました」

浦 田「はあ、そうですか」

岩 崎「そして今度本願寺があそこへできましたものね」

浦 田「それはいつ頃ですか」

岩 崎「19……10（1910）ころじゃないかな。できたのは」

浦 田「でね、あの……ホーム極楽なんですけど、またやっぱり土地が平地で
まあ耕すのに非常にイージーだったこともあるんですけども、まあそ
うゆうふうに着我部さんなんかがおられてですね。ホームの方は日本
人のあれが……」

岩 崎「なかなか盛んでしたよ……ええ」

浦 田「そうゆうことも極楽の中にはいってるんじゃないですか？」

岩 崎「多分それもはいつていますかもしれません」

浦 田「それであの……ハワイ島にずっとどれくらいおられたんですか。結
局」

岩 崎「あそこに1917年頃、1907かな」

浦 田「1907からでしょう」

岩 崎「1907から1918までおったんです」

浦 田「1918といいますとですね。あの世界大戦が第1世界大戦が終わった年
なんです。1918」

岩 崎「そうでしたかなあ」

浦 田「いやあ、僕が生まれた年なんです」

岩 崎「はあ、そうですか？」

浦 田「ははは、1918」

岩 崎「1918に私日本に帰って……その1914にお父さんたちが帰りましたか
らね、その当時、お父さんが連れてきたんだから、連れて帰るゆうて
きかなかったんでしょ。だから私それを独立生活してから自分で日本
に面会行くからそれまで許してくれ、ゆうてから3年ほど猶予をもら
うたんですよ。それじゃからもう一生懸命で働いたもんですよ」

浦 田「旅費をつくるために」

岩 崎「旅費をつくるために」

浦 田「ハイハイそれでいかれたんですか？」

岩 崎「そしていろいろ費用がかかって……」

浦 田「はあ、関心ですね。両親はそのまま日本に」

岩 崎「ええ、そして1919年に結婚してそして妻をハワイにつれてきました」

浦 田「はあ、岩崎さんが、それじゃ日本の方よね。純粹のメイドインジャパンですね。やはり熊本県ですか？」

岩 崎「はい」

浦 田「あの、岩崎さんはホレホレ節歌いますか？」

岩 崎「私じゃなんですが、一番始めの行こかメリケンくらいのところですよ」

浦 田「ちょっとあの？僕はね、いろんな人の歌をね、録音しているんです。歌が上手下手じゃなくて歌の節ね、みんなやっぱりちがうんですよ。あっちこっち少しづつね。でも似てるところが多いんですよ。だからちょっと行こかメリケン……というのをやってみてください」

岩 崎

へ 行こかメリケンヨー、帰ろか日本
ここが思案のハワイ国
ハアーついて来いついて来い

浦 田「なるほどね、やっぱりだいたいふし同じですね」

岩 崎「あんまりかわらん」

浦 田「少しどっか違う」

岩 崎「まあ個人個人でそりゃ違いますよ。わたしらのもほんもんじゃないんじゃろうからききおぼえじゃから」

浦 田「あの……どこで習われたんですか」

岩 崎「ホームでですよ。キジ畑で」

浦 田「あの、岩崎さんはどう思われますか。この歌はやっぱり広島为民謡か
らきた……僕はそう思うんですけど……どう思はれますか」

岩 崎「さあ、私はわかりません。そのぶんはどこから来たか」

浦 田「広島の人やっぱりホームにも多かったですか」

岩 崎「多かったですよ。広島、山口、熊本、沖縄の人と……沖縄の人は後からです」

浦 田「1885からでしょう。官約移民が最初に来たのはね、15年で1900になるでしょう。岩崎さんは官約移民の始めから17年目に来てるわけなんです」

岩 崎「それくらいになりますね。私らの時には官約移民ではなかったからね。解放されとったですから移民上がりでした」

浦 田「そうですか、今が83才、結局ハワイにいるのが76年になるのですか。全部で。6つの時からでしょう、6つの時というのが1902でしょう。今が1979」

岩 崎「72か73」

浦 田「全部で77ね。随分になるよね」

岩 崎「長いですよ」

浦 田「ずっと長いことおられていつも始め頃、特にこの第2世界大戦が始まる前、やっぱりいつか日本に帰ろうという気持ちはあったですか」

岩 崎「いえーいつかいつぺんはかえろうという気持ちでから働いたんですが」

浦 田「その、帰るとするのはね、今の帰るとするのは、あなたも僕でも日本に遊びに帰るんでしょう。戦争前の特に一世の方はもう錦をかざって日本にかえろうという気持ちがあったんじゃないですか」

岩 崎「だいたいはおやじ達を帰らそうという気持ちばかりでしたよ」

浦 田「自分よりも」

岩 崎「いえ、自分よりも、ばあばさんが98までいきってから、帰れ帰れゆうてすすめよったんですが、とうとうあわれなしにはてたから」

浦 田「ほう、まあいろいろ参考になることをおききして、随分長いことね、ホレホレ節でやろうという気持ちでやり出したんじゃないですよ。他の人が偶然やってみたらどうかということで、それで僕が放送局なんか仕事をしていたでしょう。新聞社なんか仕事していたでしょう。

そうゆう関係なんですよ。それで自分がミュージック好きだったもの
ですから自然とホレホレ節の研究はじめたんです」

岩 崎「あんたみたいな人がおったからよかったですよ。このホレホレ節を生
かしてしまうから」

浦 田「まあ、誰かがやらないとね、ほれほれ節をやるのにはカナカ語知って
いなくてはいけない、熊本べんも知ってなくちゃいけん、広島弁も
知っとらにゃいけんね」

岩 崎「あんた等みたいにいちいちくわしくわけをしらにゃいけん人はなかな
か骨がおれますよの。私らみたいにそのまま知らずに歌っている者
はなんでもないが」

浦 田「一世の方がきいたハワイの言葉でもとても完全なハワイの言葉じゃな
いですからね。日本語的なハワイの言葉ですからね」

岩 崎「ほんとですよ」

浦 田「岩崎さん、ほんとにありがとうございました。今日は、とてもたす
かったですよ。ホームにいかんですんだですよ。それとね、一番僕は
知りたかったのはむねにおくということです」

岩 崎「私らもちょっとわかりにくいんですが、たぶん」

浦 田「僕はね、ちょっとでもそのプランテーションでね、仕事をしておっ
たらそのわかるんですが、全然やっていないでしょう。だから非常にわ
かりにくいんですよ」

岩 崎「それで仕事していない人たちに説明するのは、なかなかしにくいです
よ」

浦 田「そうですよ、今日はほんとうに今日は偶然あんなにして熊本県人会で
お会いしてですね」

岩 崎「まあ偶然でしたがね」

浦 田「ほんとに有り難かったですね、どうも」

岩 崎「私も帰りに一言あんたにものをゆうて帰ろうかおもうたらすぐ連れに
くるゆうもんだから、失礼いたしました」

浦 田「いいえ、どうもありがとうございました」

3. 松 村 友 次

12/24/1965KPUA放送局の佐藤しのぶアナウンサーがインタビュー

佐 藤「どうも夜分におじゃまいたしましてすみませんが、お名前とあの……
おとしとお願いいたします」

松 村「はあ、私松村です。年は82才になりました。」

佐 藤「お元気でございますね。今日はあのまたおじゃまして、ホレホレ
節とそれから、ハワイにこられましていろいろご苦労なこともござい
ましたでしょうから、そのお話など伺いいたしたいと思います。あ
のう、日本からいつ頃こられましたんでございましょうか。こちらの
ハワイ島の方へ？」

松 村「ハワイ島でなくて最初にホノルルへ来たんですがね、明治40年（1907）
ね」

佐 藤「はあ」

松 村「ホノルルにいきまして、そしてホノルルのアイエアという耕地にね、
重労働させてもらいましたよ」

佐 藤「はあ、さようでございませうか、ホノルルには何年くらいいらっしゃっ
たんでございましょうか」

松 村「ホノルルにはね、ちょっと3年くらいおりましたがね、1909年にホノ
ルルに大きなストライキがありましてね、日本人の……それがために
耕地をみなひきあげたりなんだりして私どもはハワイ島へこう渡った
わけですよ。でハワイ島に來られましていろいろとご苦労がございま
したことでございましょうが一番印象にのこっていらっしゃるご苦労
な話を伺いして失礼ではございませうでしょうか」

松 村「印象に残ったといってもわしらは無学の……無学の者でなあにも印象
という様なことはありませんが、ただハワイ島に来てね、印象に残っ

たのは少し覚えているのはこの雨の名物のヒロがね、昔は30日でも40日でも雨がふり続いたもんです」

佐 藤「ああ、さようでございますか」

松 村「ええ、でここでは弁当は忘れてもかっぱを忘れるなてなことをよくゆうとります」

佐 藤「なるほどね……はあはあ」

松 村「いえ、これは1つ、今に思うておりますね」

佐 藤「そしてあの、ホレホレ節をずっと歌われたわけでございましょうね」

松 村「ホノルルでね、ホレホレ節をならうたんですよ、ニューメンの時に」

佐 藤「はあ、左様ですか」

松 村「まだ条約が切れておりましたからね、私どもは、ホレホレ節はみんなから習うてこれがホレホレ節だとゆうて習うたんですよ」

佐 藤「それでホレホレ節は何年くらいおやりでございましたでしょうか」

松 村「さあ、ホレホレ節ってものはここで仕事をすりゃ、ホノルルにいてもこちらに来てもプランテーションの仕事をせりゃ、葉むしりゃなんどすればすぐホレホレ節がでますから……」

佐 藤「はあ、左様でございますか、それじゃ昔を忍んで今夜1つホレホレ節を歌っていただきとうございます」

松 村「今は私は……昔はとっても声がよかったんですが、今は声が悪いんで」

佐 藤「とんでもございません」

松 村「ふしも悪いし、ホレホレ節はとともできませんね……いいですか。

へ 三十五仙のよ、ホレホレしょうより
パケさんとモイモイすりゃ アカヒカラ

へ 三十五仙でよ、もうけたかねを
夜はハレハレで みな取られ

へ 行こかメリケンよー 帰ろか日本
ここが思案の ハワイ国

へ 一夜一夜でよー 心が変わる
どいつが横矢を 入れるやら

佐 藤「どうもありがとうございました。お年に似合わずなかなか堂々たるお声でございます。今ちょっとお聞きしましたら、おうたの中でハレハレというお言葉が出ましたがどうゆう意味でございましょうか？ ちょっとご説明願いませんでしょうか」

松 村「あれはね、ハレハレってゆうことはね、昔よるになると、このホノルルのアイエアあたりにテーブルを出してね、ランタンを4つも5つもテーブルの上につけてそしてパケさんが一生懸命かねを持ってきてそしてサイコロをころがしてね、そしてハレハレハレハレゆうんですよ。それへ行ったら晩にはそこがバクチなんです。で昔は警察なんかはプランテーションにはなかったんですよ。プランテーションの巡査がいるだけです。夜9時までね、それを許しておったんですよ」

佐 藤「なるほど」

松 村「ええ、カンカハレマクレハレハレやってゆうてもうけたかねはね、内緒で盗んできちゃ、ママのポケツのを盗んできちゃそれではったもんですよ。それで取られたもんですよ」

佐 藤「夕方何時頃から0時頃までなさったんですか」

松 村「いええ、6時頃から9時頃までもう灯をともし頃になると、もう街みたになる」

佐 藤「今の歌の中にもう1つわからないのがございましたんですか？アカヒカラってゆうのはどうゆう意味でございましょうか？」

松 村「あれはね、パケさんとモイモイスりゃたった30仙、ホレホレスリヤ30仙しかならんがね、パケさんとねればね1円になるそんだらーになる

という意味なんですよ」

佐 藤「これは恐縮いたしました。どうも有り難うございました。ホレホレ節を歌いながらお働きになったそうでございますが、最初日本からホノルルへ上陸なさいましてこちらの言葉の英語とか土着の言葉がお分かりになったのでございましょうか？」

松 村「わかりません。わからないからね。ホノルルのアイエアプランテーションで働きながらね、私はルナがダンプロミルミルダンプロミルミルってゆうからね……はあ、これはダンプロミルミルってミルミルゆうことは日本語によう似とる。こりゃこれくらいの英語ならおぼえるわい思うてミルミルゆうことは……ところが後でみなさんがミルミルとゆうことは下を見てゆうことよってゆうてね、たまがらしたことがあります」

佐 藤「ああ左様でございますか、そうゆう風にしてあの、皆様はお言葉を習われたんでございますか？」

松 村「それからね、私、ルナがこうゆうんです。ワンタレーワンタレー、わしの名を呼ぶからね。この野郎、馬鹿やろうわしをバカにして鼻たれい、鼻たれいって、いつかこのやつなぐってやらうと思っとたら後から聴けばね。それが私の垂番号で138、それを私は鼻たれってきいたわけですよ」

佐 藤「どうも、懇切丁寧なご説明ありがとうございます。ただいまのは松村友次様でございました。どうもありがとうございます。夜分」

4. 大 山 幸 雄

1974年8月、戦前朝鮮京城中学校後輩の作家梶山季之さんとともにファリントンハイ近くの元山玉萩宅にて録音

1921年19才の時呼び寄せで来布

広島県佐伯郡出身

作家の梶山季之さんと同じ出身地

大山幸雄は1928-1968まで、40年間フォート学園で教鞭をとる。戦後はフォート学園の校長となる。録音当時62才

浦 田「40年も先生を……長いですね。そしていつこちらにこられたんですか」

大 山「1928からね1968年までやったんです。ちょうど40年」

浦 田「40年ね、ホレホレ節ずいぶんあっちこっちできかれたんでしょう」

大 山「さいたりパーティいったら歌ったりしますよ。それだからどうしてもホレホレになるんじゃないかと思うんです」

浦 田「あの……小さい時に広島で櫓こぎ歌というのをきいていたでしょう」

大 山「それきいていたです。中学までおったからね」

浦 田「やっぱり節がよく似ているんですか？」

大 山「似てる、私はいつもそう思っていましたよ」

浦 田「それから来てると思われますか。その節は？」

大 山「私はそう思ってたね」

浦 田「ちょっと歌ってみてください」

大 山

　　へ　　沖の暗いのによ一白帆が見える

　　あーれは紀の国みかん船

梶 山「似てるですね」

浦 田「他に文句はないですか？それだけですか」

大 山「文句はしらね。あまり」

浦 田「よく似てるですね」

関 屋「広島から出た……それからでたんじゃないの」

大 山「僕もこれから出たと思うのだがね、私のがホレホレに似てるかもわからんのよ。歌ったのがね、山田亮一ね、あれがよう知ってるよ」

浦 田「その方はやっぱりやっておられたんですか。漁師を」

大 山「やっとたんですよ。ここでも漁師やっとたんです。鰹船にのっとったんです」

浦 田「今いくつくらいの方ですか？」

大 山「67、8才の」

関 屋「ホレホレ節というのは、ほれほれやるとき、わいたわけじゃあるまいし、やはり日本から来たんでしょう」

大 山「ちょうど黍をむしるのにね、調子がいいからちょうどあうんだね、それを実際歌いながらやった人の歌と後にみんなの前で歌うというのはね、どうかかわらんよね」

梶 山「民謡でもね、ほんとにそこの土地にいつの民謡と三味線はこしらへたのはまた違うものね」

大 山「それからホレホレ節で佐藤松子かね、あれが歌ってるのなんかもう全然これはここの年寄りが歌うのとは違うものね」

梶 山「あれじゃホレホレできやせんものね」

梶 山「ホレホレの時は素手でなくてやっぱり手甲脚絆でやったんですか」

関 屋「葉をとるでしょう、ありやみな素手ですよ」

大 山「ありや、手甲、手袋だけやって……」

関 屋「我々の年配じゃ、ホレホレやった者はおらんもんね」

大 山「私が山田亮一の櫓こぎ歌をやってあんたにあげるよ」

浦 田「お願いしますね」

梶 山「どれくらいの動作でやったんですか？リズムでいくと、わりとゆるやかな感じがするんですが……」

大 山「そう、ゆるやかでなくちゃね」

関 屋「ずーっと1日やるんですからそうは」

浦 田「そうはやれんでしょうね」

大 山「10時間労働でしょう」

関 屋「できるだけゆうゆうにやらにゃ、その……やれんですわい」

大 山「しまいに……あの、ぬいぬいアメアメとかいうのは、あれはどう意味
なんですか」

浦 田「あれはね……あの歌から来ているんですよ。

へ 小原待て待てアサンが来るけ
バイバイアメアメヌイヌイマカナ

バイバイ、後からでしょう、アメアメというのはね、腰を降ることヌ
イヌイというのは動作をはげしくするわけ、カナカの言葉ではげしく
という意味があるわけ、はげしく腰まわせという……そしてマカナと
いうのは、to giveあたえる、だからはげしくこうやるという意味なん
です」

大 山「しっかりおけつを振れということ」

浦 田「その歌からきてるんじゃないですか、そのさきゃチャッチャでいうで
しょう、あまりいいたくない下品な言葉を用いる時、かくし言葉とし
てハワイ語を用いたわけですよ。……浦田の最後のところはテープと
違って書き加えてあります」

5. チャップリン松の森（本名は松永岩之進）

1975年4月22日、浦田スタジオにて録音。

山口県柳井市出身。大正5年（1916年）8月、両親の呼び寄せで来布
カワイ島リフエ耕地でハッピーコー等をやる

浦 田「ではハワイ相撲界の元老チャップリン松の森さんにホレホレ節をうたっ
ていただきますけども、松の森さんこれ、どこで習われたんですか？」
松の森「わしが日本から来た頃、うちのお母さんがよく歌っておったですが。
そのママのきき覚えでやはりまだおぼえております」

浦 田「いつ頃ですか、それは」

松の森「はあ、もう16、7くらいの時です」

浦 田「今はおいくつなんですか」

松の森「75才」

浦 田「75才。随分昔の話ですね。でお母さんはいつも歌っておられたんですか？」

松の森「いつでも洗濯したり火のしするとき歌いよったですね」

浦 田「それじゃ、お母さんはやっぱりホレホレやっておられたんですか？」

松の森「やっぱりホレホレしたりカライ、ハウハナなんかしたり、野良仕事を」

浦 田「そうですか、それじゃ1つお願いします」

松の森

へ 三十五仙のヨー ホレホレしょうよりゃ
パケさんとモイモイすりゃ アカヒカラ
アーソノワケチャッチャイヌイヌイアメアメ

へ 頼母子落としてよ ワヒネを呼んで
人にとられて ベソをかく

へ 条約切れたらよー キナウに乗りて
行こかマウイの スペクルへ

浦 田「どうもありがとうございました。あのですね、お母さんがそういう歌を歌われた時にですね、ホレホレ節のまあつらいことなんか話していましたか」

松の森「イヤーやっぱりゴヘーゴヘーゆうて随分ルナにゴーヘーゴーヘー」

浦 田「随分つらかった様なことってましたか？」

松の森「ハイ、それじゃからあの時分には、よくお母さんがゆうとったよ。

リフエ、コロアにゃ鬼がいるって鬼いうのがルナのことでしょ、1番ひどい所だったらしい」

浦 田「じゃあ、カワイ島の砂糖黍畑ですね」

松の森「そうです、わしらあの頃にやはり親子ずっと4、5人でみなハッピーコウやとったですよ。今ではハッピーコウはみなミシンでやりよるがあの頃にゃ担ぐのがちょっとひどい仕事で病気になる人が多かったですよ」

浦 田「やっぱりハッピーコウっちゅうのはハッピーというのは担ぐんでしょ。コウちゅうのは、辞書ですね、ハワイ語とイングリッシュでかいた、コウいうのは砂糖黍のことだそうですね」

松の森「砂糖きびのことです。黍をハッピーするからハツパイコウっていうんです」

浦 田「あは、そうですか」

松の森「カワイ島いう所はとてもカナカ語ばかりどンドン話すところで、私はカナカ語にはあまり不自由しませんよ」

浦 田「他に何か面白いカナカ語ありましたですか」

松の森「たくさんあるがちょっと今なによ話すゆうても」

浦 田「日本人同士にはその必要はないけども、ハワイアンと話す時にはやっぱりこう出てきたんでしょ？」

松の森「出てきます。自然に出るですよ」

浦 田「ハワイアンがたくさんおったんですか、その頃？」

松の森「カワイは割合多かったですね。土人が」

浦 田「土人はどんな仕事をしていたんですか？」

松の森「もうあの頃は仕事ゆうても別に仕事はやはり政府の仕事しよったの」

浦 田「政府の仕事いうと？」

松の森「道作りやらいろいろなことを」

浦 田「あはあは……」

松の森「道路の掃除をしたり道路の仕事をしたり草とったりよくやっておった

ですよ」

浦 田「あのですね、ホレホレ節がメロディですけどね、どこのメロディだと思いますか」

松の森「こりゃやはり中国の広島山口方の櫓こぎ歌ゆうのがあるですよ。ちょっとあれに似たところがあるからやはりそうじゃないかしら思います」

浦 田「松の森さんはどちらの出身なんですか」

松の森「山口県のほんとは大島郡の平群ゆうところで今は柳井に合併したから」

浦 田「大島郡ね、小松のある……ああそうですか。その櫓こぎ歌となにかこう似てるところがあるんですか」

松の森「あるですよ」

浦 田「ではちょっとその櫓こぎ歌を1つご紹介願いたいですが」

松の森「できるだけまあ1つ

へ やーれーおせおせおせおせ 船頭さんも水主（かこ）もヨー
押さにゃのぼらぬのーやれ この瀬戸はよー
（水主とは船員のこと）

へ やーあれ船は櫓次第路はカコ（水主）次第ヨー
水主は船頭さんのやーれ金次だよー

へ やーれ船の新造と娘の美人はヨー
人が見たがるやーれ乗りたがるー

浦 田「いやいやどうもありがとうございました」

引用文献

- 中原ゆかり (2010) 「ハリー・ウラタの採集ノート：朝倉カツエ・藤間美佐が語る〈ホレホレ節〉」『愛媛大学法文学部論集人文学科編』第29号,pp.51-77.
- 中原ゆかり (2011) 「ハリー・ウラタの採集ノート：井上熊太郎・安武宇一郎が語る〈ホレホレ節〉」第30号,pp.83-107

〈謝 辞〉

ハリー・ウラタさんと知り合ったのは、1997年の夏である。ウラタさんは日本の歌を教える音楽教室を開き、様々な日系のイベントや日本との交流事業で活躍していらしかった。ウラタさんのスタジオはホノルルのダウンタウンにあり、私は頻繁に立ち寄って、その度に日系の音楽事情を惜しみなく教えていただいた。〈ホレホレ節〉の収集は、ハワイ日系の音楽界で長年にわたって活躍されたウラタさんが、最も情熱をかたむけられた仕事である。ウラタさんは、日本語で資料や論考が刊行されることを楽しみにしておられたが、2009年に亡くなられた。純粋に一世たちの〈ホレホレ節〉を残すための努力をなさったウラタさんの仕事、そしてどのような相手でも尊重し、対等な姿勢でつきあってきたウラタさんの人柄を、私は心から尊敬している。ウラタさんのノートに登場する方々をはじめとした日系一世の方々、そしてウラタさんのご冥福をお祈りしたい。

Field notes by Harry Urata: Shigeto Iwasaki, Yūji Matsumura, and Sachio Ōyama, Chaplin Matsunomori talk about “Hole-hole bushi”

NAKAHARA, Yukari

“Hole-hole bushi” is a folk song sung by nineteenth-century *issei* (first-generation Japanese immigrants) while at work in the sugarcane fields in Hawai‘i. The song was not taken up by the *nisei* (second generation) and was largely forgotten after World War II. However, Harry Urata, a *kibei nisei* (a *nisei* educated in Japan), recorded performances by *issei* and unified a tremendous range of idiosyncrasy in the melody, thereby obtaining copyright to the song in 1981. Since then, the song has spread, and musicians have performed it in both Hawai‘i and Japan.

Urata not only recorded *issei* performing “Hole-hole bushi,” but also interviewed them about their field labor and their lives, and transcribed his recorded tapes into notebooks. In this paper, I quote from the sections on Shigeto Iwasaki, Yūji Matsumura, and Sachio Ōyama, Chaplin Matsunomori following the interviews with Katsue Asakura and Misa Fujima (published in the *Bulletin of the Faculty of Law and Letters, Humanities* 29), and the section on Kumatarō Inoue and Uichirō Yasutake (published in the *Bulletin of the Faculty of Law and Letters, Humanities* 30).